

ひともっこ山

2025.3.17 校長 西谷 秀幸

今年の5年生まで、移動教室で行っていた群馬県の榛名というところに「榛名富士」と呼ばれている山があります。富士山のようなきれいな形の山は「〇〇富士」と呼ばれていて全国にあり、この「榛名富士」もその1つです。



この「榛名富士」のすぐ隣に、実は、「ひともっこ山」という小さな山がもう1つあります。5年生と6年生は、榛名移動教室に行ったときに見ていると思いますが、覚えていますか。

この山がどうしてできたかという、こんな言い伝えがあります。

昔々、群馬県と静岡県に2人の大男がいました。どちらも、自分が日本一の大男で、自分が日本一の力持ちだと思っていたので、「次の日の朝、ニワトリが鳴くまでに、どちらが高い山を作るか」力比べをしました。そのときに、土を運ぶ道具として「もっこ」という道具を使いました。

さて、2人の大男は、一晩中かけて、どちらもすごい大きな山を作りました。しかし、朝が近付いてきたとき、榛名の大男は自分の方が勝っていると油断をしてしまって、最後の土一杯、「ひともっこ」分を山にのせずに山の横に置いて休んでしまいました。

反対に、静岡の大男はもう「ひともっこ」分、ドサッと土を山の上にのせました。するとその瞬間、ニワトリが鳴き、静岡の大男が勝って、榛名の大男は負けてしまったのです。

そのときの静岡の山が日本一高い「富士山」で、榛名の山が「榛名富士」、そして、隣に「ひともっこ分、残った土」が、この小さな山「ひともっこ山」になったと言われています。また、負けた榛名の大男が泣いてできたのが榛名湖になったそうです。

この話は、「あと一息というところで、最後に気を緩めてはいけない」ということを教えているのです。

さて、いよいよ3学期もあと5日間、5年生と6年生は卒業式があるので、あと6日間になりました。皆さんの中には、「あと5日間か、もう少しで終わるから、もうがんばらなくてもいいや」とか、「今の学年ではよくがんばったから、あと5日間はゆっくりしよう」と思ってる人はいませんか。

そういう人は、榛名の「ひともっこ山」のようになってしまいますよ。

3学期、そして、今年の学年はあと少しですが、気を緩めることなく最後までしっかりと勉強したり生活していきましょう。今、頑張ったことが新しい学年の、6年生は中学校での良いスタートダッシュになります。

これで朝会のお話を終わります。

(裏面に「先生方へ」があります)

〈先生方へ〉

今年度も残り授業日数は5日間（5～6年生は卒業式を含めて6日間）となりました。

3月はいそがしい日々が続きます。いそがしくなると自分とは違う他人の欠点に何かと気付いてしまいがちですが、お互いの良さを学び合い、欠点を補えるのが成長する組織（＝チーム）だと思えます。苦手な部分をお互いに補い合い、「何か手伝うことはありますか」などと声をかけて、お互いに助け合っていきたいですね。

さて、今回の「ひとつっこ山」の話は、3月の学校だよりも書いているので、すでに御存知の方も多と思います。内容面はもちろんのこと、5年生になったときに子供たちが移動教室（令和7年から倉淵移動教室）で意識してくれるように、意図的に話をするようにしています。

この話は、巨人ダイダラボッチ伝説に絡んだもの、富士山との山作り競争のもの、カラス天狗に関わるものなど、全国各地に様々なバリエーションがあるようです。残りわずかになると、子供たちは、余裕モードになったり、あきらめモードになったりと、人それぞれです。「最後だからがんばろう」という気持ちで残り少ない日々を過ごさせたいと考えています。

各クラスでは、特に、この時期の頑張りが「次の学年の良いスタートになる」ことを話してください。「次の学年になったら頑張る」という子がいるかもしれませんが、今、頑張ることが、次の学年の最高のスタートダッシュになります。そのことを強調しておいてください。各学級での実態に合わせて、補足などお願いします。

【資料】 榛名の大男（民話）

昔、昔、あったとき。榛名に、大男が住んでいました。どんな大男かという、ふさふさと毛の生えた胸のあたりに、いつも白い雲が浮かんでいるほどの大男でした。いつも赤城の山に腰かけて、緑の野原のなかをゆるく流れる利根川で足をあらっていました。そのころ、駿河の国にも、一人りの大男が住んでいました。駿河の大男は、いつも箱根の山に腰かけて、広々と広がった前の海に、ダラリと足を投げ出して水を蹴っては大波を立てていました。二人は、どっちがどっちともいえないほど大男でしたから、歩きだすと、ズシン、ズスンと地震のような音が響き渡り、その足跡は深くめりこんで、そこに水が溜まると、大きな池ができるほどでした。

「おれは日本一の大男だ。そして、日本一の力もちだ。」

二人は、お互いに自慢していました。

ある日のことです。二人の大男が、原っぱで、バッタリ出会いました。

「き、貴様は、誰だ！」

榛名の大男が、相手に向かって、こう言うと、

「おれは駿河の大男だ。そして日本一の大男、日本一の力もちだ。そういうお前こそ 何ものだ！」

と駿河の大男が、叫びました。

「そうか。俺は上州の榛名のものさ。そして日本一の大男で、力もちだ。」

二人の力自慢の大男は、互いに自分こそ日本一の大男で、力もちだと言ひ合いました。日はだんだん傾いて、西の山に、赤々とした太陽が傾き始めました。いつまで言い争っていても勝負は決まりません。そこで、もどかしそうに榛名の大男が言ひました。

「俺は今まで、日本一の大男で、力もちだと思っていた。だが、なるほど、おまえも、俺に負けないくらいの大男だし、

力もありそうだ。ひとつ、二人で力比べをやらないか。そうして、どっちが強いのか、決めようではないか。」

「そいつは、おもしろい。さっそくやってみよう。お前は体が大きくて、うすのろみたいい見えるが、あんがい利口者だな。

ではどうだい……山の作りっこは……おもしろいぞ。」

「山の作りっこ……どうするんだ？」

「明日の朝、一番鶏が鳴くまでに、お前と俺と、べつべつに1つずつの山を作るんだ。そうして、その高さを比べてみて、高かったほうが日本一になるのだ。」

「よし、承知した。今から始めよう。今晚中かかって、すごい山を作ってやるぞ。一番鶏が鳴くまでだな。約束を忘れるな。」

ふたりの大男は、お互いに明日の朝は、おれが日本一だと思ひながら、約束して別れました。

やがて駿河の大男は、自分の国へ帰ると、この辺が一番いいだろうと思う場所を選んで、ウンウンとモッコで土を運んで、山を作りはじめました。榛名の大男もまた、国へ帰ると、一生懸命、山を作りはじめました。二人とも、モッコに土を山ほど入れては、ドドドドと原っぱにぶちまけて、

「それみる。大きな山が出来るぞ。あんな奴に負けてたまるものか。」

「なにくそ！ 明日一番鶏の鳴く頃には、あいつの鼻を明かしてやるぞ。」

ウンコラ、ドッコイ、ウンコラ、ドッコイと、二人の大男たちは、夢中になって働きました。やがて、日が暮れて夜になり、空には星がキラキラ輝きはじめました。もうすべての生き物がすっかり寝こんでしまった夜の空気を乱して、二人の大男ばかりは汗を流しながら、ドドドドと、……ウンコラ、ドッコイと、土を運んではあけていくうちに、東の空がようやく白んで、朝が近付いてきました。

「それっ、夜が明けるぞ。もうひと息だ、ガンバレ、負けるものか！」

ふたりの大男は、最後のガンバリだと、ありったけの力を出して働きました。なにしろ、大男たちが、一晩中、夢中になって作った山ですから、すごいものです。大地から、すっかり浮きあがって、その頂上に立てば、世界中が見渡せるほどです。

榛名の大男は、自分の作っている山がずいぶん高くなったのでふと気が緩み、最後にモッコに入れた土をそのままそばに置いて

「おいおい、駿河の大男！ もう、この辺で降参しろ！ もう勝負は、こっちのものに決まったぞ。」

と、はるか遠くつき立った山の頂に見える駿河の大男に向かって怒鳴りました。そのとき、駿河の大男は、ドサツともうひととモッコ、山のような土を、山の上にあけました。

「バカをいえ！ 勝ったのはこっちだぞ。そく目玉をむいて、高さをはかってみろ！」

駿河の大男は、怒鳴り返しました。

「なにくそ！」

榛名の大男が、それならばと、山のそばに置いてあるモッコに手をかけた、ちょうどその時でした。コケコッコーと、一番鶏が山のふもとで鳴きました。やがて、夜がすっかり明けてみると、くやしいことには駿河の大男のほうが、榛名の大男の山よりも、ひととモッコほど高いのです。榛名の大男はちょっとの油断で、とうとう駿河の大男に負けてしまいました。

「ああ残念だ。くやしい！」

「アハハハハ……しかたがないさ。やっぱりおれが日本一の大男で、力もちってわけさ。」

駿河の大男は、カラカラ笑って、太い胸毛を気持ちよさそうに朝風にそよがせていました。

榛名の大男は、よほど口惜しかったのでしょう、ボロボロと大きな涙をこぼして、オイオイと泣きました。それが滝のように流れて1つの湖ができました。そのとき、駿河の大男の作った山が富士山で、榛名の大男の作った山が榛名山で、泣いた涙でできた湖は榛名湖です。それから榛名山のそばに、もう1つ小さな山があります。それは「ひとつっこ山」といわれ、榛名の大男が、最後にひととモッコの土を置いてできた山だそうです。

『榛名町誌 民俗編』より http://www.hunterslog.net/dragonology/S/10202b_org.html